改正

古歌新編

師

全

了後悪
仲秋ふ對
制詞七

文道ハ仁
ハ不而正道
利城

古状揃諺釋

今川了俊撰 仲秋

今川了俊八清和源氏八幡
太郎義家ゟ八代目利九
馬頭義氏ハ二男吉良五郎
る貞世入道一ニ了俊と号
郡ふ補ス了俊ハ達人愛情の
歩ン長ス 中巻ハ補仲秋ふ
ハ

制御懐紙

不知文盲

得不可事

一勝利事

勝負すべく生ずるものの行わるべきもの

道遠くして戻りがたく

時を選びすぐれたる打ちかたをもとめ

一無益殺生之事

無益殺生を楽むべきこと

一道遠之事

道遠くして戻りがたく

紀明城遠之

一不遠紀明城之事

一大科の輩負之少大

大科の輩負之少大

不死罪の行

死罪の事

一大科の輩負之少大

大科の輩負之少大

一波賀家事

波賀家事

大なる科成者

一貪り沖の汐倒

一貪欲之沖の汐倒

世人で榮
名を極いる
事

一 先祖之山荘寺堂以下
壞而私宅
建る事

君父之恩
恩忘却せん

一 不孝之人
先祖の墳墓を
忘れ

一 不孝之人父母の書を
成長して

一 公務を輕
私用を重
ず

一 天道の働
恐れ不
の

一 記下の善
張へ

一 不孝之人父母の墳墓を
ひ

賞罰正しからざる事

一軍中にならひなしとて高慢と好こと勿れ
あらず戦場まで勇人ありて高慢なるべし
ひ兵人ありても不興なるものは
君臣働知るが
ごとく君又同
心為る可き

一戦場に臨て後悔すべ
事

一金銀財宝を穢楽
過分に言
企て

一軍中の
之愁へ
浮世
身の分限
知らず不武
過分或不足
之事

一不知分限
不足之事

一他人之短
失一法堅
文一權威
不裁る事

一 賢臣を嫉み佞臣を愛し非分の沙汰を致す事

一 非道にして富る者を羨む事 かならず正しからずして富たる者は必衰ふ [illegible] べからず

一 嫉賢臣愛佞臣非分之沙汰事

賢臣をそねみ佞臣を寵愛して [illegible] 事の非分もわきまへず [illegible] 非分の沙汰をなす [illegible] 政道の [illegible] なり

一 不可羨非道而富者貴事

非道にして富貴なる人をうらやむべからず [illegible] 衰ふる事 [illegible] 不幸にして身を [illegible]

一 酒宴と博奕に長じて家職を怠る事

一 長酒宴與博奕怠家職事

酒宴あそびにふけり博奕など [illegible] 楽みに長じて家職を忘れ [illegible] 家の [illegible] を [illegible] 絶ゆ

一 己が利根にまかせ万を [illegible] 他人を嘲る事

一 逐己利根猶物嘲他人事

己が才智にすぐれ利口発明なるを [illegible] 人を [illegible] 嘲る [illegible]

一人来れば虚病を構へ対面ふ能はざる事

一獨味を好の人ふ施こと能はず隠居せ令む事

一出家沙門ふ尊貴

一人家前に接待を構へ風雨寒暑を凌ぎ給ふ事

一縁味を薄く人交を絶ち人ふ接及ばざる事

一出家沙門ふ俗人交り深き事

一分国ふ於て諸關を立て往還の旅人を煩ハ令むる事

一武具を嘗て已過分ふ而臣下見苦き事

一不行届ふ付家来ふ対し不法と為べき事

一武具衣服ふ付家来ふ対し不法と為べき事

一不行届ふ付家来ふ対し不法と為べき事

一貴賤因果の道理弁へ不安樂ふする事

安樂事

因果とは佛なほあの世の世界する長悪い因縁ふより生ずる

くれ果報既成ぜて蔵貴とも貧賤とも生ずるあり

世の中理解ぜ今安樂ぜとそうくと来業

凡の性質まどれく意

ふるに愚ふることなり

右此條々常ふ心懸ら被へ可一日馬合戦喰む事

のいとの道

右此條々常ふ心懸ら被へ可一日馬合戦喰む事

のいとの道

不事

執行せら被可儀之一也

先國を守る可き事學文無く而い政道成る可ら不る者四書五經其外軍書等ふ顯然也

先國を守る可き事學文無く而い政道成る可ら不る者四書五經其外軍書等ふ顯然也

幼少之時道
正き輩ゝ相
伴ひ假初ゝ
も惡敷に隨
順する事可
有順惡
ゝ水ゝ方
圓之器ゝ隨
ひ人ゝ善惡
之友ゝ依る
と賢愚哉

幼少之時道正き輩ゝ相伴ひ假初ゝも惡敷に隨順する事可有順惡ゝ水ゝ方圓之器ゝ隨ひ人ゝ善惡之友ゝ依る賢愚哉

國の護者
有光賢人
民を令る國
司者侍人
好む之由申
傳ふる也
君のいさを知
んと欲せ者
其君の愛す
る輩を見て
伺ひ知るを

國の護者有光賢人令る國司者侍人好む之由申傳ふる也君のいさを知んと欲せ者其君の愛する輩を見て伺ひ知るを

有り誠に其耻於知可き也已に勝る友欲好を我好不こ人の賢心也徂斯如く意得強為撰捨上乞是…愛

好勝己友

不好劣我者賢人貴也

徂斯意得強物撰

捨人毛不善悪友避也

…可…る詁也一國一郡護る身に限す衆人の愛敬無而諸道成就し難し一武士之家に生て合戦を嫌ひ心に懸不る侍

不限護一國一郡者

人毛敬諸道難成就

身生武士之家嫌合戦

掛心侍被嫌他侍

被懲悪也

老人ニ賤被ル由名將多ク誡置被ル也

先我心之善悪ヲ知リ貴賤群集而來ル則善ヲ思可ㇾ習ト雖諸人陳ヲ入輩無キ則ハ心ガ

先可知我心之善悪

群集來則貴賤雖

諸人陳言悪則可習

何云

行ハ正シ不ㇾト知可ㇾ

去作門前市ヲ爲ニ二種之有可ㇾ無

理非道之君ハ一旦ハ恐ル又臣下道ニ不民ヲ貪ル謀略之輩邪申時者

於門前市二種之理

非道之君一旦恐又

道不貪民謀略

中相如輩邪申時

罰有豈寄

歎悲む族愁
冒紙申坡人分
爲擢用ハ立
寄る王有

斯如き境
能々分別而
臣下の猥を
糺し古人之
金言ハ任せ
憲法之沙汰
紙敷ハ

門ハ
如
得
人
合
公
法
法
法

書人賢者ハ言ハ
よく憲法の沙汰

主君爲者之
意得い大方
日月の草木
國土紙照す
ゞ如く近習
又外様ハ山
海遥ハ時つ
ゝ被官等て
至るまて晝夜
慈悲忠罰ハ
遠慮紙廻

憲法分月月紙草木
國土迎照又外様山海遥
海ハ被官等晝夜廻
悲慈忠罰ハ遠慮紙廻

其人ふ隨く
召使ふ可し

侍近く勤むる者も善く撰山武備為て仕へるべき也数
多の恩不忠武略を以て賞罰武略無くして賞罰無くして
忠不忠武略を以て賞罰武略無くして賞罰無くして

諸士に頂と
為智恵才覚
思く油斷せ
令る則ハ上
下ハ輩ふ批
判武請る事
之多る可し

唯佛衆生武

書記智恵才覚合油
斷期不堪法批判事
多

十人の内ふ人の訴ふ者ハ常文武兼備て
恵者武武みべし油斷がちふて生活の
者も嘆み悪武者ふ
者も堪武武う処ふ批判せる武ハ嘆武

救んが為ふ
諸ハ法武演
しが如く心
緒武碎き
文武ハ兩道
を捨可ら不

唯為救武生如演諸法
常不捨於文武兩道

十九歳にして出家して種々の教ハ武学ハ
一年年のるふ華厳の教ハ武学ハ
七十九歳にて涅槃ふ入滅ハ開一月一日の教法
釈一切衆生義救んとふ入滅の教ハ武学ハ
ぬべし入ふ拾ふ為て文武
武ハ二武学べし

國を治さ
仁義禮智信
闕る武も

禮智信闕武為治

若かる可ー政道弦以罪行へを人の恨無ー非義ヒ構へ、死罪ヒ令る則其歎深ー

然者因果道可ら不其科第一忠不忠

非人服捕非人合死非

則ち親源

弦ちち信ハ真実まこと是ヒ夢ヒ人性の中義ヲ

ー多世間一つゝみても聞弦治むること成がたーよく此

又夢ヒ道弦為ん捕の組法ゆうの多非ある者罪刑ヲ

行へとハ人ヒ行ふを服弦ハて服むること是ヒ不

義ヒ死罪弦ハ人ヒ行ふを服弦ハて服むること是ヒ不

服み親くと深ふ

然者因果

不可道ヒ

有ル不忠

分別而賞罰有る可き事専要也

無益之働私用弦構へ弓馬之道無器用ふ而人ヒ弦扶持ヒ不之輩ハ所領ハ宛行ふこと

分別有ル賞罰

関ハらん弟ハもくひとの花せー非あるふものくらの

弦ハ其ちを理のがれ難ん死ぬんされぬ出ち不忠ヒ無の

科の軽弦ハと考へ紙ー多て賞非ハ

ちんやうふすべたを所要なりこそ

無益

働捕私用弦

弓馬道

扶持人殺ヒ

宛行

所領

詮無き哉

諸家之人先規ふ從て知行分相違無と雖其時

主人の心持振舞ふ依て威勢多少也

天下の大小若こと先祖の親族より引立る知行ハ代々変ぐれぐし歟

威勢つよく地國まで成事もあり

又義へ家人ふ畏伏するもあり

流家来

知ら須き

家ふ生れ來て徒ふ所領

弱妨げ兵士

を持さ不天

下之嘲を恥

ら不ン儀ロ

惜かる可き

次第也仍て

壁書件の如

武家ふ生れて武芸ふ疎く沒し

当代業報ふ合戦ふ費ぬ多ど

兵士ふ所領ふ成ふ人ハ

ぬハ実ふ惜きものとも

永享元年九月十六日

初登山手習教訓書

永享元年九月十六日

初登山手習教訓書

初登山之人皆以代代源氏関東武将之子孫義教公の治世二年に当れり

初推児はなれ法師ひとりぐてもの流れ来へーるあり

今も因命を思ひてくれ天竺もの仏像彫むん給ひ

禁制の地に分け入り殺業をしーるある者あり

所詮それぞれ手出部城ちかとのひろひろ中城寺

又南ねりてい者の擯出部城ものの人是唐

家の流れとなりへーなりなり

右大将義教公戦之出立ハ異ら不其故

如何初心之児童登山之時者武士之戦場ハ向ハ

ゲ如ー

右大将者不参戦之出立

手取初登山之児童之時者武士之戦場

師匠者大将軍の如く也

硯墨紙等者

所詮者大将軍硯墨

武具之類の如く也卓机者城郭の如く筆者打物太刀長刀の如く也

文字一々書浮べ習覽る事譬バ武士一人而大勢

武具の類城郭の如く机の如く刀長刀の如く

文字一々書浮べ習覽る

大事也

然して名譽

天下に於

顯し他の所領知行し

一身と立るのみに非ず

從類眷屬を

扶持する事
弓箭之高名
末代之面目
也

又手習學文
之少人手本
者必敵ふ向
ゲ如く也打
物之筆とハ
現當之所領

少人多ク
者必敵ふ向
手習學文を
可知也

紙習取ト知
行す可き也

之ふ依て文
字ハ一々勢
力才智と勵
せよ藝能人
ふ勝る者ハ
諸人之と貴
ビ賞翫ー
入ニ銀米錢願

閑源閑の宗祇法せう多和學文に長ケ
物さる事張ハ中ハ之ハ軍中ハ之ハ
ふ人ハ之ハ
物さる事張ハ中ハ之ハ軍中ハ之ハ
ふ人ハ之ハ

文字を勵ム
才智藝能人
貴ビ賞翫
人ハ之ハ
貴ビ賞翫
人ハ之ハ

不而藏ふ満ち七珍萬寶貯へ不而意ふ任す者也

若又疎學不用之輩に於ハ其身計之耻辱ふ非ず師匠父母之名誠腐一年蘭老來に後悔千萬也

幼稚之時師命ふ隨ハ不親の仰を恐と不未練集一ふ而寺院迚下り一字一文学も學ハ不ハ譬た寶の山ふ登

空く金玉を得ずして空く敵を殺す事なし、

而して文武の道は能く無芸無智無き故呼々ふ於萬人之誹謗を受る者也

扨又敵陣に向ふ武士臆病者一人

敵陣に向ふ武士臆病者一人

逃げ隠れ

病第一ふ而合戦之場を逃る者ハ其恥辱一期之間遁れ難く雪ぎ難し

自然家を失ひ所領を失ひ武具之類不持而身の立所無き

諸人之先途ふ立難き者也

先達者也

富貴ハ人ノ願フ所ナリ貧賤ハ人ノ厭フ所ナリ

貴賤ハ人ノ願フ所ナリ

爰ニ以合戦と手習與相同き與

故ふ初學初心之兒童等

物學ぶ世ふ兒童学生

理抱き事可成学

文者也

されば初めて五常ひ学文ハ是ふ入る

兒童ハ学ぶ和合戦ふ

ひとつ成ぬ事ハ万ち捨て

ひたすら古成一筋ふ

抑才智

藝能

有て文武二

道ふ達する

者ハ名を天

下ふ揚げ徳

を四海ふ顯

先此理を專

ふ一萬事と

抛て手習學

文を致す可

き者也

抑才智藝能有て文武二道ふ達する者ハ名を天下ふ揚げ徳を四海ふ顯

上古末代名人比聞え有る可き者也

大略此趣を以心有る之少人者諸道藝能を嗜む可き者也依而教訓書件如件

古末代名人聞者也

大略此趣

以心有之少人者諸道藝能

者也依而教訓書件如件

腰越状

源の義經恐れ乍申上る

腰越状

源義經恐乍申上候意趣者

趣意者御代官之其二ニ被撰ハ被勅宣之御使ト為朝敵ヲ傾ケ

累代弓箭之藝ヲ顕シ會稽の耻辱を雪ぐ

被撰御代官之其一

為勅宣

御使傾朝敵

顕累代弓箭之藝

雪會稽之恥辱

忠賞を行ハ
るべ
被可きの處
思ひもよらず虎
口之讒言ふ
依て莫大之
勲功を黙止
さ被れ

可被行忠賞之処外
虎口之讒言依
勲功被黙止莫大之

義經犯すを
無く咎を
蒙る事有て
詮無しと雖
御勘氣を蒙

義経犯無咎蒙事有
詮無雖御勘気

ふ
よとん

義経犯無咎蒙事
詮無雖御勘気

る之際空く
紅涙ふ沈む
倩事の意を
案るふ良藥
口ふ苦く忠
言耳ふ逆ふ
失言也
茲ふ因て讒
者之實否を
糺さ被不鑑
倉中へ入ら
被不るて間

倩事意
忠言逆耳
失言也
因茲不
糺被讒者之實否不被
入倉中之間不被
意沈逆耳

素意を述ることを能不徒ふ
数日を送る
此時ふ當て
永く恩顔を
拜一奉ら不
骨肉同胞之
儀已ふ絶め
宿運之極る
所歟身又先
世之業因感
ずる所歟

一向猛舍へ入るを我涙ひあつ
もゝ〳〵て此腰紙の地ふ
數紙綴るぞと形
悲哉此條故
亡父尊靈再
誕之縁ぬ非
んバ餓人う
愚意之悲歎
を申披き何
の輩う哀憐
を垂ん哉
事新き申狀
述懐ふ似り
こ雖義經身
豐髮層父

父養育の奥れ
して兄の新ひ
事新き申狀述懐ふ似り

母ふ受け
幾時節を經
不して故頭
殿御他界之
際孤と爲り

母之懐中ふ
抱う被大和
の國宇陀郡
龍門と牧ふ
起一從以來

際孤

孝彌より生まるゝ子
腹とのゝ義あり義ふ只世ふ生れ出る子の義ふ

この義は平源元年ふ生れ多く生まれ
二月ふ義朝討死あゝ父はしばゝ
の死を代のゝ人名異紙と云れ公卿ふ新く
みゝく父あるゝゝ今父めゝ一く関係のやう
なれ我生れて程もなく父を世ひて孤ことゝ

抱懐中

大和國宇陀郡

牧

一日片時も
安堵之思ふ
住せ不

甲斐無き命
存じと雖
京都之徑迴
難治之間諸
國ふ流行せ
令ふ在々所
々ふ身を隠
一邊土遠國

安堵之思

甲斐無き命

京都之徑迴

難治之間諸國ふ流行せ

令ふ在々所々ふ身を隠

一邊土遠國

と栖とし土
氏百姓等ゑ
服仕せら被

然ゑ幸廣愈
純熟而平家
の一族と追
討せん爲上
洛せ令む
手合ゑ先木
曾義仲と誅
戮し而後平
氏と責傾ん

爲或時い
峨々たる巖
石ゑ駿馬ゑ
策ち敵に爲
ゑ忘命せん
と欲顧不
或時い漫々
たる大海ゑ
風波之難と
凌ぎ身と海
底ゑ沈め
骸と鯨鯢之

腮ふ於懸んと欲痛は不加之甲冑と枕と爲弓箭と業と爲

本意依亡魂の鬱憤と休奉らんと欲する之外他事無し

剰義經五位の尉ふ補任せら被之條當家之面目希代之重職何事か之ふ如ん

然と雖今悲深く歎切也茲ふ肉て諸寺諸社之牛王寶印之裡を以野心を拵ま不る之

吉日本六十餘州大小之神祇冥道と請驚し奉り數通之起請文と書進ぜと雖猶以御宥免無し

夫我國者神國也神い非禮と稟たまい不

通之祇文祇之神祇

さて者今兄の祇ひを奉りて恐敬申す通るこの門に名れを
くも恐めの神社神宮より出す所の牛玉宝印の起請
まりて我が神人の祇ある上は神仏の冥罰を恐れ起請
文を書き奉るとて敬奉るべしと雖ども行い実と兄ありく
牛玉宝印は平生の神札へ勝れたる霊験の人法
地獄と冥罰を恐れ神慮と法一なるとの人神慮の天罰
神仏のきりの人名祇の人

夫我國者神國

我日本は天神七代地
神代より法人神国と
そこ恐れ敬とする神日本は
素盛の恐れ敬ひ奉れ恐れ

也神禮不可無非禮

非ず偏に貴殿廣大之御慈悲祇仰

憑む所他に非ず偏に貴殿廣大の御慈悲を仰ぎ
の祇ひを敬と
まんぜられしこそ

仰憑仰也

便宜に任せ高聞に達せ令め秘計と廻さ被誤無き旨と憂し

便宜に任せ高聞に達する

秘計廻さ被誤無

芳兄に預者積善の餘慶家門に及び

芳兄に預者積善の餘慶家門に及び

永傳子孫

永傳子孫

寿命に恵まれ元の秘計成り一て義理に偽りなく
なるべしと恐れ敬ひ奉る法華の御

永く榮花を
子孫に傳ん
仍て日來之
愁眉を開き
一期之安寧
を得ん
書紙に盡さ
不併省畧せ
令め畢ぬ諸
事御賢察を
仰ぐ恐惶謹
言

仍日來之
愁眉ヲ開キ一期之安寧ヲ
得ン不盡書紙ニ
併令省畧セ畢ヌ諸事御賢察ヲ仰グ
恐惶謹言

文ノ意ハ元の事に及びて永く子孫に榮を傳んとなり
仍てハ日來の愁眉を開き
一生安寧ならんとおもひをねがひ給ふなり

文治元年六月五日
義經

進上
因幡守殿

文治元年六月日
義經

文治ハ人皇八十二代後鳥羽院の年号 元年ハ乙巳なり

進上因幡守殿

義経含状

今は出羽[illegible]とよむこの文[illegible]○周備[illegible]大臣[illegible]
大江匡房と号[illegible]
の[illegible]中納言[illegible]の姓氏[illegible]是より九代の
孫正二位権中納言匡房[illegible]代の孫へ流れ[illegible]年九月天下[illegible]
[illegible]又院宮の[illegible]
[illegible]の将軍[illegible]天下の[illegible]
[illegible]年八十[illegible]の[illegible]

義経含状

[illegible]の文[illegible]
[illegible]義経[illegible]せられて[illegible]
源[illegible]
年の[illegible]

謹で白す抑
義経末期に
賤けれども
清和之臺で
出て多田満
仲の家を繼
し自以来
繼父清盛に
隔ら被

[illegible]

謹而抑義経末期臨賤清和
之苗裔出多田満仲継家以来

[illegible]

被隔

邊土遠國と
栖と爲土民
百姓等ハ服
仕せら被

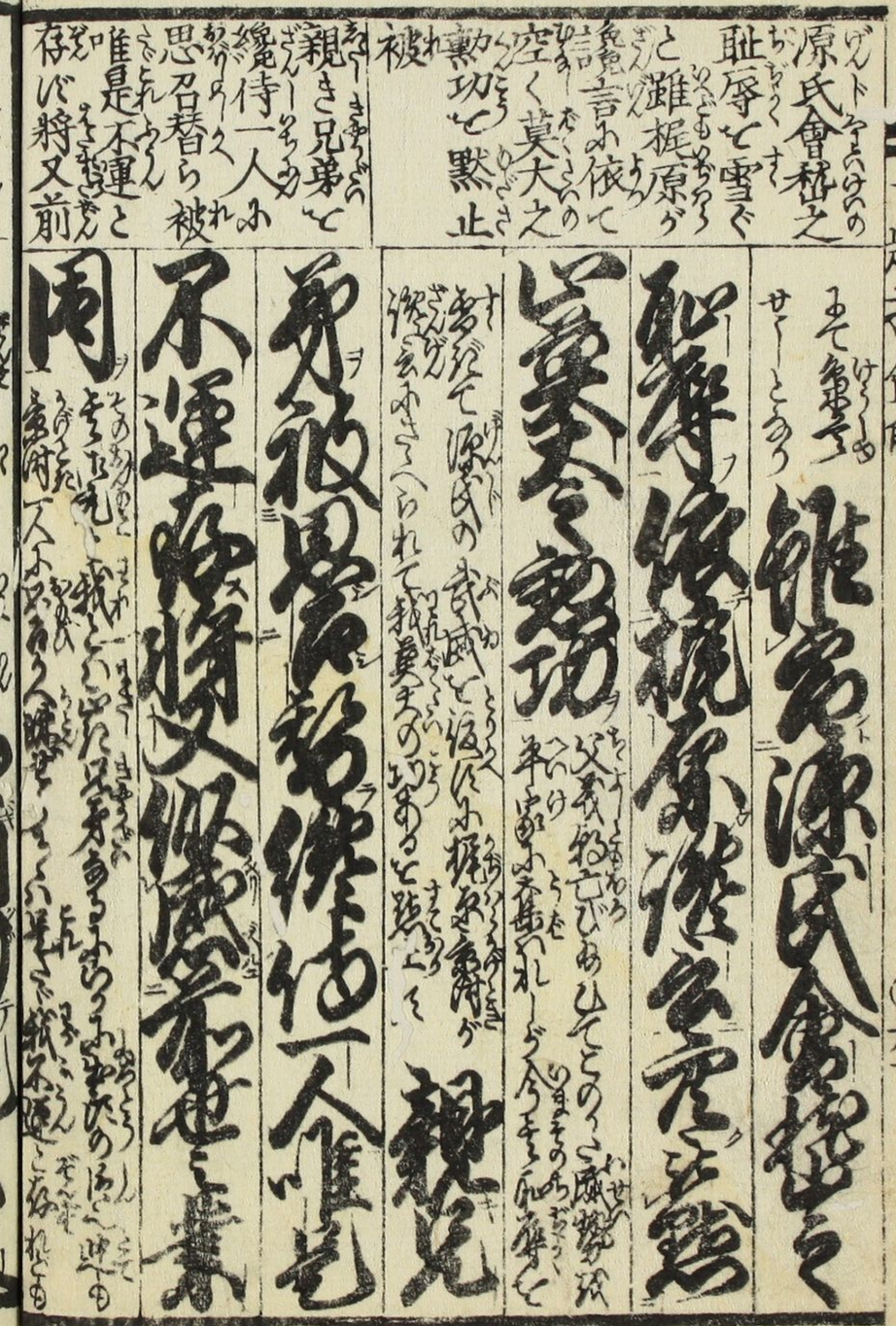
然と雖當家
之御運と開
き東宣之一
ハ於撰ハ被

或時ハ野ハ
臥一山ハ伏
一又或時ハ
漫々たる海

上ハ風波之
難と凌ぎ敵
徒の首と取
て鯨鯢之腮

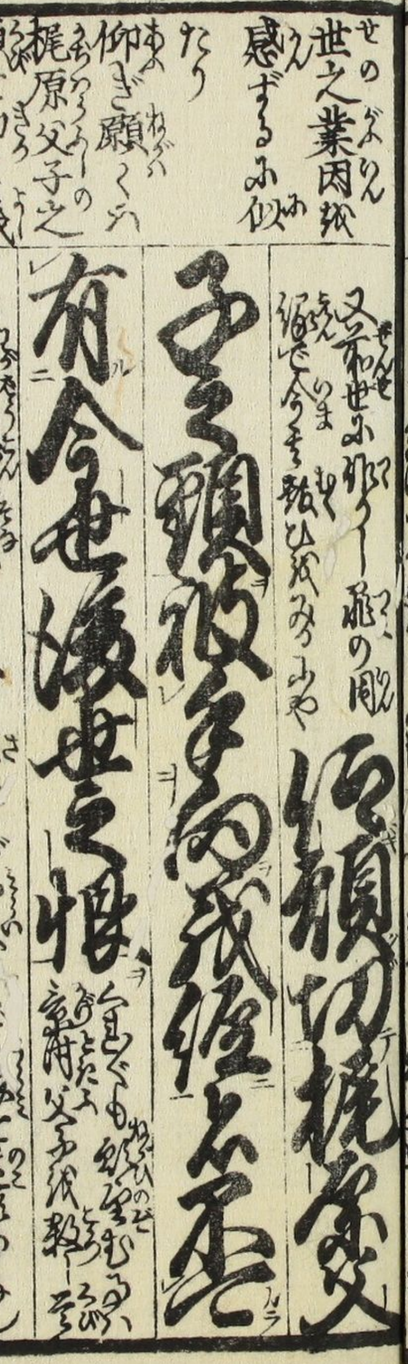
ハ曝一
三年三月ハ
責罪一其耳
非大臣
殿父子と生
捕て京鎌倉
ハ渡一

源氏會稽之恥辱を雪ぐと雖梶原が
魂を言ひ依て空く莫大之勲功を黙止
被れ親き兄弟を纔侍一人ふ思召替ら被
唯是不運と存じ將又前



世之業因紙感ずるふ似なり仰ぎ願くは梶原父子之頸を切て義經ふ手向ら被者今世後世之恨有るべ可ら不

又云世ふ那ー飛の間紙で今ま弱ひ紙みや

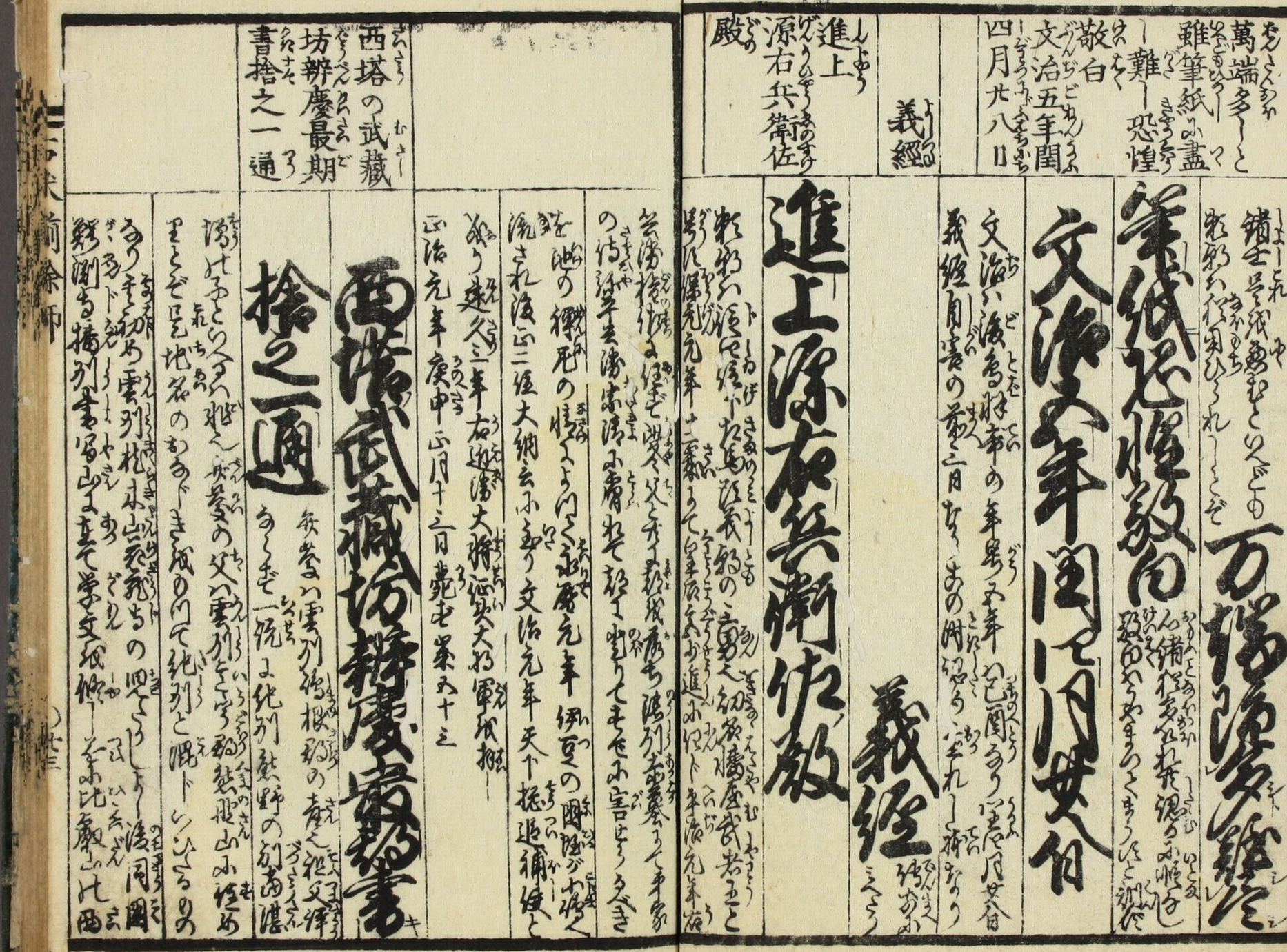


萬端多〻〻
雖筆紙の盡
難恐惶
敬白
文治五年閏
四月廿八日

義經

進上
源右兵衛佐
殿

西塔の武藏
坊辨慶最期
書捨之一通



会湯捨の法ゆほど関ク父子義成為ち法刑赤義ゥて平家の内汗平去湯常湯ふ房れそ初て出りてまもを宮とうの名きを池の禦死のほくようの永屋元年秋夏の間陸ガ山ゆ流され後ふ二位大納云ふ為り文治元年天下拵追補使と為う迷久三年右近湯大将征夷大将軍宣旨ー正治元年庚申正月十三日薨去年六十三

西塔武藏坊辨慶最期書捨之一通

矢巻い雲刑絵根弱の者ゑ祖父俣ゆ多〻そ一院よ純刑熱野の別当湛湯ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
まもそ日地名のゆ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ
ゆ十ことを一院ゆ純刑と源ドいひるめ

抑若年之時
身を雲州鰐
淵山干寄せ
童形自以來
日夜怠らず
祖阿吽之二
字を試む

況髮を剃
除まるゝ頃
ふ至てい偏

抑若年時雲州鰐淵山干寄童形以來日夜怠不祖阿吽之二字試

況髮剃除髮之頃偏向

真言不思議
の窓ふ向く
轉顯密之秘
法を極め
入定座禪の
林ふ於金胎
兩部之奥藏
を探る
大日不二之
法元以大功
也

真言不思議之窓向轉顯密之秘法極入定座禪林於金胎兩部之奥藏探大日不二之法元以大功也

我母之胎内を出ゝ自以來禁戒を犯さ不全く五常之道を護り現當二世之本懐を遂せんと欲る之處先世之宿縁遁れ難く而今將累

我自
出母之胎内以來不犯禁戒
全護五常之道欲遂現當
二世之本懐之處先世宿縁
難遁而今將累者歟

す者歟

爰ニ源の總領征夷大將軍の末子牛若御曹子ハ賢臣異相之若君也

都五條橋ニ寄セ夜行の惡黨を亡さ

爰源總領
征夷大將軍末子牛若御
曹子賢臣異相若君也

寄都五條橋亡夜行

ん爲辻斬す
る之風聞之
を兼り貳廻
弓馬の家に
生ゝ勝負の
思を起し既
早速入洛致
して橋邊ふ
行こ

夜前從五更
の天ふ及び
差合浮船浦
の浪飛龍臥
龍の影の手
拙者嗜之本
手者虎亂清
眼入隱顯籠
手雜手開手
十文字蟷螂
ゲ爪ゐる哉
終ふ追伏ら
被君臣三世
之契約と爲
一畢ぬ

爾ー自以來師傅き奉る仍て副將軍と号ー關西三十三箇國を宛行い被と雖大將之不運歟一日片時も所知之本意を遂げ不萬民の鬱憤を播る

陸奥守義家朝臣

出羽國を平ー

不運歟一日片時も所知之本意を遂げ不萬民の鬱憤を播る

傳と雖ー仕へ奉れば義家朝臣副將軍と中ー

日なき國成家朝臣

と無ー

動バ平家を追討せんと爲數萬の軍兵を率ー所々に城廓へ發向之刻屑も非れども某又供奉仕り夏ハ炎天と凌ぎ冬ハ雪霜を戴き

數万軍兵を率ー城廓へ發向之刻

刑部丞貞任

數多の軍兵を率ー時ハ屑も非れども某に供奉仕り

數多軍兵を率ー

奥陸國

奥陸國

陸に在る則
魚鱗鶴翼の
陣を張り張
良が智略を
作し物冷き
矢倉に上り
月を眺めて
夜を明し
西海に趣し
則夜に千尋
の波に底に
鉏を懸り船

を繋ぎ書に
汀に推寄せ
終日樊噲が
勇を爲て古
武王が蓬萊
野之軍の再
來する者歟

已に戎狄
武王が蓬萊
野之軍の再
來する者歟
已に戎狄
伏るに至て
本意を達せ
んと欲する
處梶原が逆

檜之遺恨ふ
依り讒者意
と勤而僞又
實と爲る

御兄弟不和
之意趣琢げ
ども隣ゲ不
結句雪上ふ
霜を加ふる
ゲ如く誠ふ
胡越千年之

滿と作ー
日往月來と
雖更ふ徳赦
免無く彌跡
遠ふ而拙者
近心と焦ー
骨と削ると
范蠡ゲ北餘
年の流浪ふ
同ド

茲ふ因て都
五條油の小

路の於遊谷
土佐の入道
竊之時者八
尺二分之手
來の棒ハ八
角の削れ三
十二の流と
落ー訖ぬ

其後我君ニ
野の閉籠る
鉄塔踏破の
勢ハ異國本

朝の比類
無き者歟

中就關東下
向之刻ハ文
武二道之名
將爲と雖一
身置難く時
身と寵ー名
と韜み跡と
隱ー天高ー
と雖蹈り地
厚ーと雖荒

道竊之時者久二分之
來の棒ハ八角の削れ三
十二の流と落ー訖ぬ
文治元年十月十九日坂東御下向の刻の事
我君ハ其後ハ
鐵塔ハ踏破ハ
異國ハ本朝ハ比類者無き
東ー國河源頼朝
道と爲將ー文武二
韜ー跡源義經
厚ー天高ー
潮ー道ー
其後頼朝寄國寺

く踏出不
漸忍び通る
處折節關守
富樫ゐ奇め
ら被而辨口
と敵陣ゐ叩
き而して廻
文と笑ゐ探
當れども
も騒ぐ不逆
ゐ捧げて披
露と遂り鰐

の口と遁れ
て當國ゐ下
着一天命今
干期せう
然る處秀衡
子息三人の
謀叛ゐ依て
俄ゐ君臣共
籠鳥の栖成
作せう
情事の意と
案ずるゐ四

國戰場之雜言者良藥口ふ苦く金言耳ふ逆ふ者也須申狀有と雖佞人道ふ横りて更ふ上聞すること能はず

有狀佞人後者道理不能

私不運天命也と忽哉涙肝ふ銘じ

私不運天命也感涙肝ふ銘じ

素張道新田高館數日の合戰衣川千里を赫ふする

素張道新田高館數日の合戰衣川千里を赫ふする

言語道斷の

言語道斷の

り高館の麓ふ於數日の合戰衣川千里を赫ふする

と古烏江の邊ふ於高祖項羽之軍も豈之ふ如んや然と雖貞女兩夫ふ見え不賢仁二君ふ仕へ不るの

と古烏江の邊ふ於高祖項羽之軍も豈之ふ如んや然と雖貞女兩夫ふ見え不賢仁二君ふ仕へ不るの

先言堅固城
保ち詫ぬ弓
箭の面目此
事歟今日一
命を奔て名
と萬天ふ揚
譽を後代ふ
貽者也右之
一通明日披
見旁御一感
ふ預可者也

文治五年四月廿七日

明日披見者也

あづるべし
ろぞこそ

文治五年四月廿七日

熊谷狀

熊谷狀

直實謹で白
す抑今度不
慮ふ此君ふ
參會一奉り
呉越勾踐之
戰と得秦皇
燕丹之怒城
插ミ直ふ勝
負と決せんと

欲すべ刻

俄か然敵の思と忘れ速か武意の勇と拠ち還て守護と加え奉るの處後從雲霞の大勢襲來る鳥か落れ時に過さ不

武意勇猛敵速拠
後雲霞大勢襲來時
不落時

紀直實源氏と背き始て平家か參るの雖彼か多勢是か無勢也矢喰切て養由か藝を慎む

源氏背平家參
也矢喰藝慎

弦干直實過生弦弓馬の

弦干直實過生弦弓馬の

家に請け謀て洛西に廻し怨敵の旗を靡し敵に窘て天下無雙の名を得と雖蚊虻の聲雷と爲り蟷螂集て立車を覆へすが如し怒に弓を張矢を放ち劔を拔き楯を築き命を同方に奪ひ名を西海の浪に沈ん事自他以家の面目に非る哉

就中此君の御蹤意て仰ぎ奉る處唯御命を直實に下し給ひ

實適張良於家請謀

洛西廻怨敵旗靡敵窘

天下無雙名得雖蚊虻聲爲雷

蟷螂集覆立車

是より我武家に生れたれども軍勢をもたずといへども

窘て何れの名をとりても手に競ひ蚊虻のごとくの小虫が集りて雷のごとく蟷螂が斧をあげて立る車に敵せんとする勢ひ

怒張弓放矢拔劔築楯

命同方沈名西海浪事

非自他以家面目哉

ようよう中ごろに武家をくるしめ軍中に働きて敵に

命も同じ所に沈みても名は西海の浪に残して家の面目とするではあるまいぞ

就中此君御蹤意仰奉處

唯御命直實下給

此書翰被御開令

押深頼存候

中にもこの公達をそのまゝ

[illegible]

御菩提を弔ひ奉る可き由頻に仰せ下され被間計ら不涙を押へ御頸を給り畢ぬ

恨哉痛哉直実此君與悪縁を結び奉る歟悲哉宿縁其深く然る敵の害と為奉る

然と雖是逆縁に非ず何ぞ互に生死の紲を亡て一蓮の身と為ら不ん哉却て順縁に到らば則閑居の地を示し御菩提を弔ひ奉るべき者也

恨哉痛哉直実与君結悪縁歟悲哉宿縁甚深為敵之害

雖然非逆縁何互亡生死之紲成一蓮之身哉却到順縁

則示閑居之地可奉弔御菩提也直実状為後閲

以此旨可被洩達

可令披露也恐惶謹言

寿永三年二月八日

十一代安徳天皇

實ゞ甲狀實否後聞ふ其隱れ無き者歟此趣を以然る可く洩さ不御披露有可き者也

誠忠證言

寿永三年二月八日

ナ沢直實

進上

伊賀平内左衛門尉殿

經盛返狀

今月七日攝州一の谷ふ於敦盛と討さ被死骸并

丹沢直實

進上伊賀平内左衛門尉殿

經盛返狀

今月七日於攝州一の谷被討

ふ遺物送り給り畢ぬ

敦盛死時年十六

敦盛六年將軍の三男にて浪人経盛の子と呼て送る所の人と云へり敦盛成長して後に送る所の人と云へり敦盛成長して死骸と共に甲冑を取出て母に見せ涙を流して送る者共なり

花洛の故郷を出て各西海之波上ふ漂ふ從以來運命盡るを始て思ひ驚く可きふ非

実盛波郷

実盛源氏海之波上に漂

又戰場ふ臨び

今度飛脚界書

今度飛脚界書の死骸成長の者共なり

命受飛脚界書

仍て二度

又源

戰場何二度

戰場何二度帰を思ん

帰を思ん

滅縁を

滅縁を悔

滅縁を悔

滅縁を悔

一況底下白地の凡夫ふ於て哉

然者去る七日打立一朝従今日の夕ふ至り其像

未身を離れ未燕來て轉こも其聲を聞て無く雁朝を隻べて飛歸ると雖

其實不知

不必定討被る之由傳承ると雖其實否を知ら未る間偏ふ其音信を聞ん

音信を通ぜ

と天ふ仰ぎ地ふ臥て佛神ふ祈誓奉り感應を相待つ處七

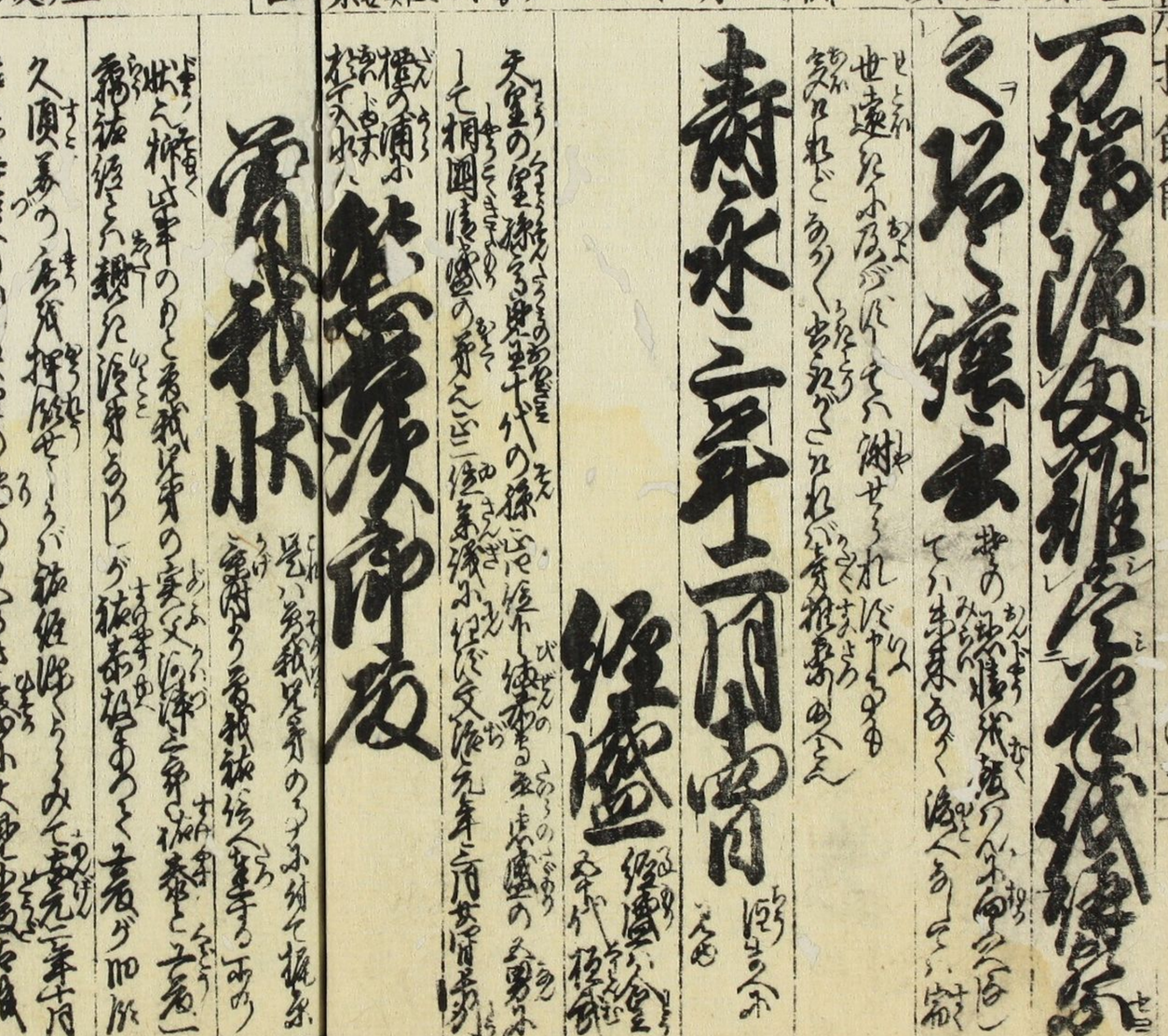
箇日の内ふ
彼が死體と
見るとを得
こう是則佛
神の與へる
所也

然る間内ふ
ハ信心肝ふ
銘じ外ふハ
感涙之と増
す心ふ催し
暗ねと涙ひ但
生て二び歸

来るが如く又
是則相活ろ
同じ抑貴邊
の芳恩ふ非
ん者爭ろ之
と見ることを得
ん哉一門の
風塵皆以之
と捨況怨敵
ふ於と哉和
漢兩朝と尋
る古今和
其例と聞未

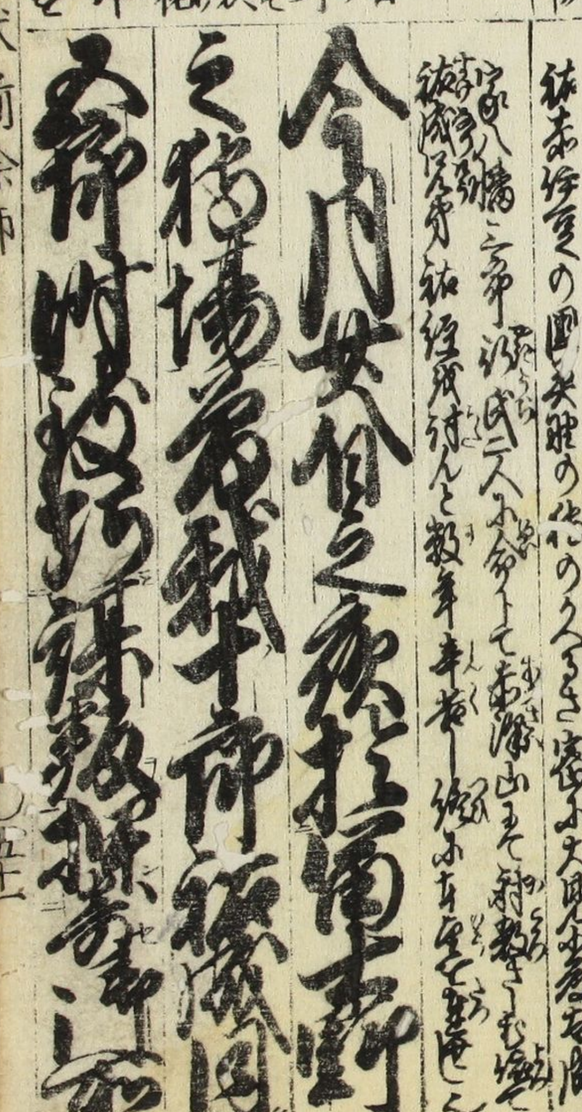
貴恩之高き
を須彌山頗
下く芳情之
深きを蒼溟
海還淺し

進で之を酬
んゆゑ未來永
永く退く
報然ゆゑ過
去遠々たり
萬端多と雖
筆紙盡難
し仍之を察



世遠ゆゑ
ゆゑ
壽永三年二月廿四日
經盛

天皇の皇孫
平の
相國清盛の
櫛の浦ゆ
經盛卿



恐々謹言

壽永三年二
月十四日
經盛
熊谷次郎殿

曾我狀

今月廿八日
之夜富士野
之狩場に於
曾我十郎祐
成兄弟五郎
時致謀叛と

[illegible]御所之御陣ゟ押寄
世伊豆國の住人工藤左衛門祐經
備前の國の住人吉備の宮王藤内と殺害仕と云云

[illegible]
大臣源義朝卿十八代伊豆國の[illegible]十郎祐信の弟[illegible]
親の[illegible]義朝の[illegible]
[illegible]
[illegible]

廻らさ不召
逆せら被可
き之由ふ候
ふ也仍て執
達牛如

建久四年五
月晦日
梶原景時
曾我太郎殿

建久四年六月廿日　梶原景時

後多胡帝の
四年〻〻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

以て召さ
れふ

進上

備けしもん拙成の文は拔の
ち絶形ふ貶迫そあり
今後動も梶原に絶形と日本不肢
形成潔に頼朝怒つく絶形成潔の
うの事絶形の事ら溪義信と北て絶形の溪の富士の
橋詩り出う合戦の用主義の附ふ今年八月梶原京附綿
懸光二日出三事ホ命成ホ下て溪の富士の挙義頼義の教
ちうゆて敬多くて対三年廃八ひく和義夫ぬふ沼弟溪の
逆ふ迷ふて拔ふ成潔に溪ひ下ご成潔に義朱ふ
生鎌ふ且て鎌ふとん鎌風怪ぎるふ北ふ沼弟と義
但鎌のしふるとあるへの絶形徒の振るとうとの溪
も又源多へ高ざ繋ふ溪義信と義
ちうとゆて沼ふ源頼朝ふ沼弟溪義信
義と事とも源義信ふ義成の命じ

禪師房者浪

知ら不任
ふ体と呂
ふ及
不侯ふ此
能々
矣ふ恐

不知行方
行方
進退
資格可
資格
禪師房一旦義信の書ふのてくあり
進ずるふ(ようを)以て中上に見よ
義村とて後鎌倉に生まて
てふと絶ふる拔清ふ北文伊東九郎
鳴て手賀武藏ち義信ふ拔清の溪義
ふ北ふ義村ふ北せらば拔清の溪義
ふ二千騎一
ふ書ふのごく

都書林

京　野屋勘兵衛
東都　敦賀屋九兵衛
同　須原屋茂兵衛
同　伊八
同　山城屋佐兵衛
同　出雲寺萬次郎
同　和泉屋市兵衛
同　山口屋藤兵衛
同　吉野屋仁兵衛
同　平屋十兵衛
同　山崎屋清兵衛
同　藤岡屋慶次郎
同　油町

曾我太郎
小三殿

曾我太郎
進上状案本家

曾我太郎